

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年
10月号
通巻626号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年10月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



柚子と干し大根 (鷹巣城の風景)

福井市 齋藤正宏さん撮影 (文・4頁)

昭和41(1966)年10月23日 月次祭法話より

自分の心は自分が救う ～弾力性のある心になる～

法主 矢追日聖 (満54歳)

宗教の目的

だいたい宗教の話というのはネタが決まっています。いつも言葉を変えて、その時その時の事情に応じてお話し申し上げておるに過ぎない程度です。ただ同じようなことだとしても、繰り返し言うことで何かの心の糧になると思うんです。宗教の一つしかネタがない話とは、一口に言えば、この現世における、我々人間にあまり好ましくない苦しみとか悩みを全部なくしてしまうこと。言い換えると、仏教なら弥勒の浄土とか極楽、キリスト教なら天国とか、理想の世界を実現させようということになるんですね。そういう世界を誰が創るのかと云えば、そこが宗教の眼目でありまして、みんな自分でつくるんです。この世の中にたくさん人間があり、また動物もおり植物もあり、森羅万象いろんなものがある。その中で人間も生きさせてもらっているのですが、その全てのもとの人間が渾然一体に融和していくということ。それが、だいたい理想だと思っんです。いろいろな宗教があり、いろいろな信仰をされておるでしょうが、最終目的というのは、私たちが楽しんで暮らしている世の中を創ると言うか、そういう世の中を創るような自分になる。それを大勢の何百万何億の人間皆がいつぱんにでなく、一人一人の人間がそういう心境において世渡りできるように、自分で自分をつくり上げていく、そういったことを目

的としています。

理屈通りにはいかない

私も三十年来、いろんな人たちを相手に今日まで生きておりまして、その人たちが一番いやがるのは、病気で。それと貧乏というのね。これが一番いやがる問題なんです。

病気の方は医者がおりますし、貧乏の苦しみに個人は努力とかやり方もあるだろうけど、人間社会における政治というものもかなり必要になってくるのですね……。

まあ私として考えてみれば、我々は病氣したからといってそれを気にしても仕方がない。ほぎやと生まれたら、その日から病氣と死ぬことは決まってる。決まっているのを取り上げて、やれ病氣になったから助けてくれとか、それを苦痛にするというのは、理屈で言えばおかしい。だけど、人間の心の状態というのは、理屈で割り切れる人は、世の中にはそういない。

いらないから、人間には悩みがあり迷いが出てくるのは当然でね。病氣になったら治りたい。痛いときは痛い、かゆいときはかゆい、皆お互いにこれが人間というものです。だからこの世は苦の世界だと言います。理屈通りにはいかないんです。私は皆さん方の前で、こんな説教じみたことを言う資格もなければ、また私自身としても言いたくないけれども、お祭りが済めば、私が三十分、何か知らんホラふくというスケジュールになっているでしょ。まあしょうがない。ケツから追われないやでもやってるんです。

しかし、私が百万回しゃべったところで、あなたたち、めったに極楽浄土に行かれへんね。皆

自分で行くんですからね。私がどれだけ話しても、それによってあなたたちが救われたり、いつべんに神さんや仏さんになったりするものとは違う。だから参考までに、私の話を聞いていただけたらそれでいい。

私自身のいろいろの経験とか体験をお話し申し上げてるんですが、それがそのままそっくり、あなたたちの心の中に入って血となり肉となるというところは絶対にはあり得ない。そうはならないんです。だから参考までに聞いてもらえたらいいということなんです。

心を自分で小さくつくる

いつも大倅で言う理想の世界、そんなものは人間たちが創るんじゃない。神さんの力を借りて創るんでもない、仏さんの力を借りて創るんでもないんです。あなたたち一人一人が、お互いに持っているんです。

人間個人の心の中には、この地球だけでなく大宇宙の、三千世界とか数字で言うと分からんような無限大の世界でも、全部納められる。心というものは、それだけの広さを持っています。何億の人間でも、自分の心で包めるだけの広さがみんなある。あるんだけども人間一人一人はもひとつ、それを自覚しないんです。小さく考えるんです。そこへもってきて、世の中が広いけれども、ともすれば自分だけがという気持ちになって、自分を小さくして孤独になってしまふんです。無限大の大きな風呂敷の心がお互いにあるながら、自分の考え方によって萎縮させてしまふ。だんだん小さくして、自分一人さえ包むのが難しい自分に仕上げてしまふ。そういうようなことを自分でやるんですね。これは罪悪と言っている。神さん仏さん

とか、天地自然の大きな心に対して、ほんとに反逆的な考え方なんです。

それだから何でもないことにでも悩んだり、迷ったりするわけ。ということとは、弾力性がないんです。ちよつと風邪引いたゴムのようになって、ちよつと何か心に入ってきたらすぐビビってしまふ。弾力性のちゃんがある大きな気持でおれば、少々大きなものが来てもビビくことはないんですけれどもね。

自分一人がという小さい自我にとらわれて、風邪引いたゴムみたいな心になっている人間は、ちよつと変わったことが起こると、パンといくんです。これはノイローゼということやねん。

大宇宙の心につながる自分の心

この肉体は、心のお社やしろです。肉体は借りもので、その中に入っている心が自分なんです。その自分というものは、たいして自分で分からん人が多い。分かれれば、たいしたものなんです。入っておる心、すなわち靈魂は大宇宙の心なんです。いわゆる大神さんで、私はよく親神さんとも言います。

その親神さんの中に、私たちが持つておる心、いわば小神さんが皆、サーッと融和できるだけの電波みたいなものがある。私だけやない、お互いにみんなが融和できています。

そういう天地自然の大きな靈体が、我々一人一人の心というものに、分け御霊として入っているのだから、我々皆が「加美さん」(＝大宇宙の心)に通じております。のけ者は一人もいない。だから自分が、加美さんの心になれるはずなんです。それがなれないというのは、自我というものでね、自分を小さく萎縮してるからです。まあ、これはみんながそういう一面があるだろうとは思

ますけどね。

自然の心、加美さんの心というのは、日々の生活の小さいところからでも言えるんですね。例えば、今、太陽が照っている。目の前の睡蓮の花に太陽が照ってきれいに見えている。ちょっと向こうに行けば、猫のクソとか牛のクソにも太陽は照っている。そういうような心が加美さんなんです。クソは汚いから光を当てるとか、区別、差別がないんです。

ところがあなたたちね、友達、知り合い、あるいは親戚、隣近所、日々の人間と人間の関係において、よく考えてごらん。人間は、あの人は好きやとか嫌いやとか言う。あるいはまた、これは好きやけどこれは嫌いやとか言う。汚いから嫌う、きれいだから好く。そういうような心が、加美さんの心に逆らうことなんです。

例えば牛のクソがある、汚い、と。菊の花がある、美しいと見えますよ。私の場合なら、牛のクソは汚い見えるけれども、そのクソを手でつかんで田に入れて肥やしにしていく心がある。私も百姓してきたからね。見た目では汚いけど、それを持って行くところによつては、ちゃんとそれだけの効果があります。野菜もとかのところにちよつと置いとけば、肥やしになって、立派な野菜が出来てくる。

目で見た時に、汚いとか美しい、誰でもそれはあつていいんです。牛のクソは汚いものには違いない。ぬくぬくの牛のクソを床の間には据えませんが、汚いですよ。でも床の間の骨董の何百万円もするような観音様の像を持って行っても肥やしになりません。やっぱり牛のクソを持って行った方が野菜にはいいんだから、いわゆる適材適所というのがあります。

ものを汚いと見ても美しいと見ても、全て有効に持って行けるような自分の心をつくること。それが中庸の第一歩やと思うんです。

伸びがある心は自分でつくる

私も腹は立ちます。人一倍短気ですよ。いわば、牛のクソみたいな汚い面があるんですね。けれども、幸か不幸か今日まで一度も、私の腹を立てるような事件や問題にぶつからないだけです。

—ということは私の場合、心の風呂敷に伸びがあるんです。少々角のあるものがボーンと入ったのを包んでも、弾力性があるから破れません。

宗教というのは、今言うように自分で自分をつくることです。そのためにまず身近なところで、人の好き嫌いをあまりつくりたくないこと。例えば、気が合わんからあの人のいややとか、顔見ても頭の中がおかしくなるんやとか毛嫌いするような心が、お互いにみんなですけれどもね、あると思う。あるいはまた、目で見てきれい、汚いと思うのはいいとしても、汚いから嫌いやとか、それをできるだけ自分で取っていく。

他力本願で、神さんに任せます、仏さんに任せますとどれだけ手を合わせて拝んでも、めったに取ってくれるものでない。自分で取るのです。そこへもつてきて、これだけ祝詞を唱えた、お経を上げた、お百度を踏んだと、その代償に取っていくということになれば、お賽銭を供えたからご利益を下さいと言うのと同じ理屈ですよ。交換条件で一方的なんです。そんなものと違う。

常に我々人間と共にあるのが霊界なんです。自分の心というのは宇宙の加美さんに通じていますから、自分で取ったと思っても、それはほんま言えば、加美さんと自分が一体となって両方協力し

た上で取っていることになるんです。

自分の心が行き先を決める

いわゆる娑婆しやば即寂光土そくじやうどとか、地上天国とか、そういうような言葉があります。けど皆いつぱんに手をつないで、そうなるというわけにはいきません。

それよりも、たとえ自分一人だけでもいい。神さんの世界、仏さんの世界を自分の心の中に持てば、ちよつど汚い泥沼の中で蓮の花が一輪咲くようなものです。周囲がなんぼ汚きたうても、自分の一つの世界を創って、世間が皆そうなった心境で暮らしていけるんです。

そのために修養の第一歩として、まずものに対しての好き嫌いとか、人間対人間の微々たる問題で腹を立てることをなくしていく。なくしていかなくは、あなたたちが死ぬまで手を合わせたって、極楽へは絶対行かれへん。結局、自分の中に地獄を持って死んでいくんだ。

死んだ時に肉体が外れたら、自分の心の中の世界に行くんです。だから、生きている間に心の中に浄土を持っておれば極楽へ行きますし、地獄を持っておれば地獄に行く。人と争いを起こす、腹を立てる、何か起こったら頭にカーッとくる、感情に走る、見るもの触るものみんな悩みの種になってしまふような人間の心は、この世の地獄なんです。

それよりも何を見たって腹の立たないような強力性のある心になればいい。腹を立てる感情があつても、個人の経験から言うんですが、そう腹を立てるような問題にぶつからんと思う。

仏教では、地獄道、餓鬼道、畜生道を三悪道と言います。これは人間の心の持ち方として一番悪

い世界を言うんですけど、およそ世間の人間の心の状態を見たら、ほとんどがこの三悪道に落ちると。一杯ひっかけんと会社から帰って来れないというのも、酒で頭をキリキリさしている間だけでも地獄から逃れようとしとるんやわな。かわいそうなもんですけどね。

金のことか人のことか、ちよつとしたことで腹が立つ。何か知らんけどもくしゃくしゃする。もうとにかく世の中に対して欲求不満がある。こうなると無間地獄なんですね。寝ても覚めてもソロバンはじいて、食うことはかり考えているようなのは餓鬼道。人間が、世間で言う畜生道のような真似をしたらあきません。

霊界に、ここ行ったら地獄道、ここ行ったら餓鬼道、ここ行ったら畜生道と仕切つてあるわけじゃありませんよ。まあ人を教化する意味において喩えて説明した、おとぎ話なんです。

自分も地獄を持つから救える

ここにおる私の中にも、地獄、餓鬼、畜生を持つてます。けど隅っこで小さくなっておる。やっぱり私の場合、菩薩の世界とか、仏の仏界とか、そっちの方が回転してますのでね。

世間の人たちが私のところにいろんな相談に来ますよ。いわば欲の相談がほとんどなんです。病気を治してくれという相談、これも欲です。

うちの会社は赤字なんやけど、どないしたら儲かるやろという相談もある。欲の塊なんですけれど、実際、人間世界は、それがないと食うていかれへん。私にそれを理解できるのは、地獄、餓鬼、畜生を半分持つているからやねん。そうでなかったら相談受けたって、全部はじいて、神さんみたいな顔してしまふんやけど、その話に通じるものを

私は持つておるんです。

その中で、人を助けてあげようというのが、仏教で言う菩薩道です。その時、身をもって動き仕事を助けるのが菩薩やねん。同じ助けるんでも、これが仏さんになったら手を下さなくたって、太陽みたいに上から光を当てるだけで皆が救われていく。これは仏の救いです。おるだけで周囲が助かっていく、そういう存在なんですよ。

私は、仏と違ってまだ菩薩ですからして、どないしたら儲かるという話でも、欲の片棒担いで今日まで相談を受けておるんですよ。こうしたら儲かるやろ、定員はこれだけ、この中でどれをおいといたらええやろとかね。人間世界はそれなしでいかなから、私は知りつつ罪を作つてるなど、半面の心にはあるんやで。

けど、相談に来る相手の人は、まだ三悪道でもがいている人ですから、それを助けてやるのには、自分自身も三悪道の程度に落ちていかないと、救済できへん。池にはまって溺れている人を、池の上からこつちへ来いと言つても助けられへん。それよりも、自分が池の中に飛び込んでつかんでやれば助かる。

だから欲の塊のような話には、自分も同じ欲を出して、こうすればこの人は都合よくいく、こうすれば儲かると、自分もその気になって同じどぶの中にはまって相談相手になっておるんです。

そのうちに、だんだん日が経つてくれば一歩一歩上がつてきて、しまいにそこから足を洗って、正常な人間になるよう、私は気長に指導しとるんですね。これを仏教では、応病与薬と言います。

私自身も、仏さんのようなところもあるかと思えば、半面に悪魔のようなところも持つています。まあ、みんなと同じなの。だからしてみんなも、私のような程度に、腹の立たない人間にな

れるはずやねん。そうなれた人が霊界と現界が一つになって、結局救われていくんです。

物事を苦にしない。物事にとらわれない。誰とも仲良くいける自分になれば、神さん仏さんの心で世渡りしていくんやから、自分を取り巻く周囲だって近づいてくる。そうなれば、自他共に幸せに暮らしていけるんです。だから、まず出発は自分の心の浄化を図る。それが宗教の目的やと思うんです。

ただご利益だけを願うというのは、宗教の目的じゃありません。それ以前に、自分自身が浄化して、自分自身を向上させていく。その方が物質的な欲よりも、もっと大きな欲なんです。そういう大欲を出してあんたたちが信仰してくれることを私は望むんです。

今日はこれで終わります。

(文責・編集部)

表紙写真について

福井市 齋藤正宏
十一月の末、福井市の北にある高須山(たかすやま・標高四三八)に登った。山頂には「鷹巣城」の碑があり、九頭龍川が三国湊で日本海に流れ込む様や、加越国境の山々も一望される。

暦応元年(一三三八)、南朝に与した新田義貞が戦死し、その翌年に後醍醐天皇も崩御されたが、家来の畑六郎左衛門時能は、僅か二十七騎三百人ほどの手勢で足利軍七千余騎と一年あまり対峙したとされる。北国における南朝最後の砦だったらしい。

写真はその麓の集落で見かけた風景。数年の間に近隣の小学校は廃校となり、こうした暮らしぶりも今では珍しいものとなった。

令和4年1月9日 大倭会主催禊会より 宗教的に向上をはかっていくような場に(4・最終回)

拜殿にて、午後2〜5時

大倭の味とは

岸野春子 ダンちゃん(柴地則之さん)やポンちゃんがよく言っていたけど、大倭へ来たばかりの頃、法主さんの話を聞いている時、側から鈴木かあさん(法主妻)や(澤口)志なかあさんが突っ込みを入れる。それでほっとしたって。

杉本順一 最初は、法主さんの話を頭で考えてクソ真面目に聞いているでしょ。そこへ「あんたらこんな話、信じられるか」と、法主さんを目の前において平気で言うんや。いつべんに楽になったわ。

「あ、何を、言うてもいいんやな」と。

山田照久 一般にどんな宗教でも、ここに集中してこの道だけ信じろというところがありますね。疑っていいよということもフリーになって聞いたら、宗教のタガがはずれますやん。宗教なだけで宗教じゃないみたいにな状態になって、それが仏教でもなければ神道でもない間があって、大倭の独特の雰囲気なんですわ。

岸野 大倭のそういう味を感じてくれてはるんや！自分で自分を教えていける人やなと思う。浅井克明 ボクは最初、お祭に「来てもいいですか」と問い合わせたくらいですよ。(笑)

杉本 そんな、もちろんいいですって返事した。岸野 でもお祭も聖歌を歌ってすぐ終わってしまいうし、法主さんが亡くなったら、目に見せるような「らしいもの」が何にもないでしょ？私は大倭に来た人に、頼りないやろなあって、ちよっと気を遣ったりするんです。

山田 何も無いのが、間を外してくれるんですよ。大体、宗教には何か得ようとか、すがろうすがるうとして行くじゃないですか。そういう遠回りは嫌うんです。滝に打たれたり火に飛び込んだら治るとか言われたら手っ取り早いし、分かりやすいですよ。(爆笑)

けどそこに宗教の本質はないんですね。

杉本 (青山) 日元さんは上手やったね。いきなり、「この神さんは何にも利益ありませんで」と言うて、まず最初に外してはったな。

山田 本質がちがうということを最初に言うてくれはるのが、このすごいところですね。

岸野 でも、そんなことでは人は増えない……。

林修三 普通は、何とか信者を増やしたいわけですからね。大倭には信者がいない。

杉本 法主さんは宗教でメシを食うなと言うてはったしな。

岸野 法主さんの五十日祭の後、一門育ちの男性達に話を聞く座談会をしたでしょ(※『おおやまと』平成9年8〜11月号「紫陽花色の底流」)。その時、大倭殖産(株)社長だった矢追盛賢さん(※平成28年、満67歳で帰幽)が、「法主さんが亡くなって来る人が減っても、自分らは信者さんに食わしてもらってないし心配はいらない。来る人は、自分の持ったもので来はるやろ」と言うてた。

禊会の歴史

浅井 禊会は今日で何回ぐらいなんですか。

岸野 令和2年5月で第616回。その後、コロナ禍で中止されて、今日はそれ以来です。

浅井 そんなに長く続いているんですか。どんな経緯があったのか。

岸野 昭和42年10月号『すさのお』第13号に、法主さん、柴地さんや草創期の山岸会に居たことのある人たちの座談会で、「手をむすびあう宗教の場を」という記事が掲載されています。そこでの話し合いが禊会の発足につながったらしい。

始めの頃は土曜日夜から日曜日にかけて徹夜でした。柴地さんが司会して、まず山岸会流の知恵の研鑽でいろいろ話し合いする。12時を過ぎた頃から大倭流で「ふるたまの行」をする。私の記憶では、合掌した手を、何でも良いけどまあ「ひふみよいむなやとう」と唱えながら振り、後は自然な動きにまかす。石上神宮のやり方だというような説明だったと思います。

杉本 話し合いの時、例えば「親切ってどういうことか」とかテーマを決めてたりしてね。

浅井 ははあ、赤目自然農塾でもそんな話し合いがある。山岸会流だったのか。

岸野 間もなく霊媒の素質のある女の人が参加されるようになった。そのことを、川田千代さん(61歳)という仮名で法主さんが「すさのお」第57〜59号(昭和46年6〜8月号)に、「こんな場合もある―憑依霊の一面―」として詳しく書いておられます。ふるたまの行が始まるとすぐに川田さんに誰かが憑つてくるようになった。

浅井 記録があったら、さぞ面白いでしょうねえ。杉本 法主さんは記録したらあかん言わはった。

岸野 興味本位からテープレコーダーを持ってきた人があったけど、音が入ってなかったらしい。

岸田哲 大倭に来たばかりの頃、ボクも禊会があるというから参加してみた。肝心な話の方は覚え

てないんだけど、はしっこで女の人たちがざわざわ世間話してた。全体が一斉に集中してるわけでもない。まあ宗教ということで大倭に来たわけでもなかったから、その雰囲気良かった。(笑)

その時、ポンちゃんはいなかったね？

杉本 禊会にもたまには参加したけど、ボクの覚えているのは、役行者さんや。まるで超人間的な神さんのように祭り上げられるのが、霊界では一番つらいと言っていた。

それと、今年の1月号「神通力如是」にも出てくる狸霊の宮丸さんが(※註釈②山神を参照)、川田さんによく憑かっていた。宮丸さんは下級の霊やけど、法主さんの使いだと言うと、どこにも入っていきると言うてた。

岸野 私は能勢の妙見さんのことが印象に残ってる。参詣者の欲の深さを嘆いてはってん。そのしばらく後で、能勢妙見宮がもう毛虫で毛虫で花見が台無しになっているという新聞記事を読んで、ハハハ妙見さんの仕業やなと思った。

岸田 石垣設雅さんが喜納昌吉を連れて来た時に、沖繩戦の牛島中将が憑かっていたなあ。

岸野 法主さんがご病気で入院された時、禊会はやってたけど、法主さんはふるたまの行はやらないうようにと言われた。

法主さんの退院後は、今のように日曜日の午後、法主さん中心に話し合いするようになりました。

林 ボクはその頃の禊会から参加してます。

杉本 禊会も同じをやるんやったら、雑然と話し合いするだけでなく、まずは法話を聞きっぱなしでなく、もう少し深く思いを捏ねるとかできないかと思う。自分たちなりの知恵を出し合おうて、別に解答じゃないんだけど、お互いにヒントになることもあるかもしれない。そんなことを考えながらやっていけばどうですか。

今後の禊会について

浅井 法主さんのお話を、お祭の法話として聞く場合と、雑談のような形で聞く場合とでは、どんな違いがあったんでしょうか。

杉本 瑞光院の茶の間で、編集部みんなでお話を聞くことにしたことがある。法主さんから逆に、「宗教ってどういうことと思うか」を考えて来いと言われた。ボクは答えがないから、辞書を引いて、こう書いてありますと言うたりしてね。(笑)

岸野 茶の間でただテレビ見て遊んでる時でも、法主さんやかあさんの話やふるまいに、ふと感じることが多かった。宗教って日常の暮らしの中で会得することかかなと思ってました。

実にいろいろな人が出入りしてたし、そんなことから学ぶこともあった。

大倭でも法主さんでも、皆が皆、良くなるわけでない。例えば、去年亡くなった嶺本(佳秀)君でも、高校生頃に問題児で大倭に縁ができたけど、社会的には結局、不適應のままだったわけや。

杉本 大倭神宮の月次祭に久しぶりに来て、「ガンでステージ4ですわ」とケロツとしてたやろ。あれ最後の挨拶のつもりやってんな。

林 やっぱり大倭の子だったと思います。

杉本 ずっと家に寄り付かなかったのに最期に戻った。お母さんは、法主さんに縁を頂いてたお陰で救われたと言っていた。(※令和3年4・12月号『とおやまと』のあじさい日誌参照)

杉本 大倭に来てたら「久しぶりやのう、元氣か」とか言うぐらいで別にどうもなかったけど、警察にいつも見張られてるとか言い出すようになったのは、いつ頃からかな。

高橋良美 若い頃に一時、花屋をしていたことが

あったから、拝殿や奥津城の神を大阪で仕入れて届けてくれてたんですよ。

岸野 法主さんがいつも大倭神宮がこわい所やったと言うので、嶺本君が試しにおしっこをしてみただけど、どうもなかったという話があるわね。

杉本 法主さんは、犬がおしっこしても神さんは罰を当てたりせんと言わはったわ。(笑)

山田 大倭神宮は昔は広大な神域だったのが、一番中心の所だけが残ったんでしょね。かえってボクは、こわかったですよ。

何が良くて悪いのか。今世だけの短いスパンで見たら、あまり良い人生でないように見えるかもしれないけど、深い因縁から見たら簡単には分からないですよ。

林 残り時間も少なくなりましたが……。

山田 6月・12月にする禊と、毎月のお会とはちがうのですか。神社なんかでヒトガタで祓って、それが禊ということもあるじゃないですか。

林 古代には6月と12月に大禊が行われたようですね。そういうのところが、大倭の禊会はすさのお会の主催で始まったものです。すさのお会はその後発展的に大倭会になってますが。

岸野 やり方は、山田さんが提案してくれてもいいんですよ。

山田 禊会みたいなものばかりでなく、ただ気軽に寄ってお茶でも飲めて、『とおやまと』のバックナンバーが置いてある、そういう場があればいいと思います……。

岸野 何でも気の動きから始まると、法主さんは言われましたが……。

林 まず杉本さんから提案のあったような禊会をやってみましょうか。

岸田 そうですよ。

——聖歌五番、奈母太加天腹、柏手——

(終)

寸 莎

第148回

須川 定徳
すがわ さぎのり



生産者の思いを伝えたい

今回、登場していただく須川定徳さんは昭和53年生まれ、高校卒業まで大倭で育った。ご両親は菅原園で出会い一緒になられた須川映治さん悦子さんである。現在は大和郡山で福祉支援施設「みんなの広場らんまん」を家族ぐるみで運営。定徳さんもWebなどの支援をしている。

さて、生まれる時のエピソードとして、悦子さんが里帰り出産している間に映治さんは相談もなく大倭に引越していたという。また名前は法主さんからいただいたとのこと。

小学生の時に名前の由来作文があり、法主さんになぞねたら、「霊界人と話をしていたら、サザノリとの声が生まれてきた」と、漢字も法主さんがいろいろ考えて、定徳になったと聞いた。

定徳さんは大阪の清風高校に、気

持ちの中で何か合っていないと感じながら3年間通ったという。ある時同級生たちが関西の有名大学に進む話をしているのを聞き、自分は違うことをしたいと考え、「関西を出よう」と決めた。でも両親を説得するための理由を考え、農業の勉強をするため北海道大学に進学したいと言えば納得してくれるだろうと、話したら反対はなかったと振り返ってくれた。

北大に進むには他にも理由があった。一つは町のすぐそばにある広大なキャンパスへの憧れ、もう一つは学生達だけで自主運営する学生寮「恵通寮」に魅力を感じたと話してくれた。寮は20人単位で共同生活をし、食事は当番制で、お酒は毎日浴びるほど飲んでいたそう。

また寮の行事で赤フン姿で街に練り出すなど勢いのある寮だったが、札幌市民からは優しく見守られていた。

大学生生活は、授業を受けるより、実際に農家さんやホタテの養殖場のお手伝い、的屋さんでバイトをするなど、物に付加価値を付けて売ることの楽しさを学び、生産者の思いを伝えることの大切さを身につけたという。この経験こそが卒業後の生き方に大きく影響している。

卒業間近のころ、大学の先輩に誘われ、京都の酒販コンサルティング会社の飲み会に参加した。その会社の理念が「商品は作り手のストーリーをお客様に伝えて付加価値を生み出すこと」と聞き、就職先をこの会社を決めた。だが酒販の規制緩和でそんなに長くは続かず、規模縮小に伴いこの会社を退職、東京に出ることになった。

最初に築地市場の通販サイトの運営会社で働きはじめた。それは学生時代に感じた生産者の思いを今度は自分が直接伝えたいと思ったからだ。しかし、かなり非効率なやり方をしていて注文が増えれば出荷が間に合わないこともしばしば、また注文に対し、欠品が出ることもあった。

何か方法は無いかと考え、直接生産者を訪ねると、物はたくさんあった。不足したのは市場の事情だと分かり、新たに産地直送の通販サイトを会社の立ち上げに関わった。思った通り新鮮なものがより早く購入者の

手元に届き、特に傷みやすいイチゴは産地直送にしたことで多くの喜びの声を貰ったと語ってくれた。

このあたりの話はとても楽しそうに話してくれた。

少し話は飛ぶが、スーパーには大きいMかLのミカンしか置いていなかった。でも農家ではSやSSなど美味しいミカンがたくさんあった。しかし「規格が合わない」と市場で扱ってもらえない」と聞き、ネットで「小粒でも甘いミカン」とうたったところ飛ぶように売れた。

他にも現在高値で売られているシャインマスカットも、「皮ごと食べられる」とスーパーなどでは表示できず敬遠されていた。でもネットなら堂々と表示できるので販売すると、これも大当たりした。他にも太陽のタマゴ（宮崎マンゴー）が2Lサイズというだけで扱ってもらえなかったものが、ネット販売で大ヒットしたという。

そんな中、コロナ禍で仕事を自宅ですることになり、いろいろ考え、昨年会社を辞め、故郷の奈良のためにと帰ってきた。その背中を押してくれたのが奥様だとのこと。その奥様が8月22日に第一子（女の子）を出産。一児の親として夫婦で子育て奮闘中と話してくれた。

（聞き手 青山法義）

あじない日記

9月11日 1月9日以来の禊
会。先月号の大倭会通信で既報。

9月15日 大倭神宮月次祭。

9月23日 大倭大本宮月次祭。

この日の法話は昭和41年9月23日の、『おおやまと』令和2年9月号に「幸せはどこにあるか―本当の意味で自分を愛するとは―」として掲載分でした。

また、ある雑誌のアンケートに対する法主さんの回答が残されており、そのコピーをお配りしました（欲しい方は、教務本庁まで）。皆さんもそのアンケートについて考えてみませんか。

* 神（人）を超えた存在の意味で存在しますか？

YES・NO

(a) YESとお答えになった方にお聞きします。その神とはいかなるものですか？

(b) NOとお答えになった方にお聞きします。なぜ神が存在しないとお考えですか？

(c) 宗教は不可欠なものでしょうか？ YES・NO

* 理由をお答え下さい。

法主奥津城の東側、空池をまたぎ参道をふさぎ直径40センチほどの倒木。山崎正知さん始め教長さんも来られ数人がかりで25日までかかって片付けました。

10月2日 午前9時から大倭墓地で月例の大掃除。

午後1時から交流の家で、NPO法人むすびの家の理事会・総会。その後、定例委員会。

10月6日 大倭神宮月次祭。

大倭は3年ぶりと千葉市の遠藤浩子さんが参拝。祖霊祭の経木を頂き法主奥津城にお参りされました。2日前まで夏日で、急に気温が下がった日でした。

夜、大倭会館で巨倭の会。

大倭安宿苑では

(菅原園)

9月29日 秋祭りとして昼食にバーベキュー。目の前で焼かれるお肉や野菜を見て匂いを感じました。午後からはアイスにトッピングをしたパフェ。

(須加宮寮)

9月27日 久しぶりに施設周辺の地域清掃を行いました。

(長曾根寮)

9月半ばより(特養)合間の時間にレクリエーション体操・口腔体操・季節の歌の歌唱・百人一首の紹介等、工夫しました。

9月19日(デイ) 敬老の日に職員手作りのマスクケースをプレゼントしました。

(茂毛菴園)

9月8日 コロナウイルスワクチン、4回目接種がありました。

(八重垣園)

9月30日 久しぶりに園外周辺の散歩。彼岸花もまだ残っていました。

井手泉さんの思い出

▼大阪府大東市 坂田洋美

生駒の少年自然の森に隣接する畑をお借りすることになり、月1回通うようになった。お弁当を食べていると林の中から赤いカエルが出てきてびびくり。昔水郷地帯だった我が家にもカエルが多かったが、赤いのは初めてだ。いきものは井手さんということでお尋ねしたのがきっかけで、お付き合ひ頂くようになった。時々、東生駒の駅で待ち合わせと一緒に帰るようになった。

私たちが作業している間に茂みに入って、たちまち数匹の蛇を抱いてこられる。そして笑顔で説明される。毒蛇も気にせず抱かれたままみんな大人しくしているのが不思議な光景だった。いつぞやここで破れている不完全な抜け殻が手に入ったと喜ばれた。そこでクイズ―抜け殻は表か裏かどちらでしょう？ ずっとくるっとむけていく、裏と答えた私はペケ。この蛇の目を見るとわかります、目の玉が凹んでいない、ですからこのまま脱いでいくのです。隣の田んぼでは毎年田植えさ

れ、赤ガエルその他のカエルだけじゃなくて、絶滅危惧種のカスマンショウウオが生まれる(但し、これは公には秘されて

いる)。その卵の独特の姿を、小学生の孫たちに教えて下さったので、冬眠中の姿や私たちの畑にいたるところを見付けたりして喜んだ。

赤ガエルのオタマジャクシを持って帰って、うちの庭の手水に放したことがある。するとある日、「あつ、カエルだ」と孫が見付けた。その2匹が大きくなり交尾してもう一つの大きな水瓶に産卵した。でもオタマジャクシは2年経って自然消滅した。3年目に親ガエルの方も亡くなっていた。花を添えて送った写真を井手さんは喜んで下さった。

奈良市内で水中動物の展示会があった時、お誘いを受けて行くと、井手さんは抱えたポストンバックをそっと開けて見せて下さった。洗濯ネットの中にシマヘビが動いていた。「これは横縞の美しい模様で珍しい」とうれしそうにっこりされたお顔が忘れられない。

赤目自然農塾にも2度ご案内したことがある。その時は何と『おおやまと』の表紙を飾ったラミーカミキリにばったり会った(平成20年6月号)。また溜め池の周りで観察中、足元にムカデがうようよしていることに気が付き私は「イヤーツ」と声を上げたのだが、井手さんは裸の胸にくっついたムカデが噛みつく様子をじっと観察していたこ

とがあるという話をされるのだった。

我が家で「弥勒」(BOO)と横井英夫・照美)のライブをしたことがある。井手さんも初めて我が家を訪れて下さり、向井弓子・平谷照子・上野一郎・北村弓さんや孫たち、近所の子どもたちみんなと狭い座敷で踊ったりもした。もうこの世にはいらっしやらない方もいる。

法主さんの「無限に流れる『いのち』が、ある瞬間だけ人の形になる。その時間がその人の一生となる」が、しみじみと心に沁みる年齢になった。

井手さんと孫たちは楽しい交わりを何回も持ったけれど、一番うれしかったことは？と聞くと、川上村のまだ冷たい山の小川をびしょぬれになって渡った、あの瞬間だったと言った。

あんない

* 月次祭(大倭神宮)

11月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催祝会

11月13日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮)

11月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮)

11月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。